

第4学年2組 国語科学習指導案

場所 4年2組教室 授業者 溝上 剛道

1 単元名 私はこう語りつぐ～ごん・兵十との文通～（「ごんぎつね」光村図書4年下）

子どもたちは、前単元において「一つの花」を学習材として、場面の移り変わりに着目し、気持ちの変化を捉える学習に取り組んできた。その中で「なること（同化する読み）」と「みること（異化する読み）」を行き来しながら、解釈を広げ深める姿が見られるようになってきた。しかし、その解釈を基に、自分の感想や考えをまとめることには課題が残った。

そのような子どもたちに、本単元では「ごんぎつね」に出合わせる。語りの構造をもつ本作品を読む中で、自ら問いを見だし、その解決に粘り強く取り組む過程を通して、言葉による見方・考え方を働かせ、自分の考えを更新し続けていってほしいと願う。

そこで、本単元では「ごんぎつね」の語りの構造を生かし、「自分はこの物語をどう語り継ぎたいか」を追究していく単元を編む。そのために、0次段階として、既習の伝承作品を読み返せるような環境を整え、学びの土台をつくっておく。その上で、『ごん・兵十との文通』という言語活動を設定し、読み手の立場から人物にお尋ねをしたり、登場人物になりきって答えたりする中で、自分なりの考えを創造するたのしさを味わえるようにしていく。

2 単元について

(1) 本単元では、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつ力の育成をねらう。

「ごんぎつね」は、複数の「語り直し」によって成立している。ごんが人間の言葉を使うのは、ごんの思いを人間たちが語り直しているからであり、おそらくその第1話者は兵十であろう。さらにその兵十の語りも「わたし（語り手）」によって語り直されている。これまで、単元終末でこの作品構造への気づきを促すような実践はあったが、ともすると勘のいい数名の子どもの発言を取り上げ、作品構造を「知る」ことに留まりがちだという課題も見られた。

そこで本単元では、初読段階で「語り」の作品構造への着目を促すしかけをつくるとともに、『ごん・兵十との文通』という言語活動の枠組みによって同化・異化の往還を促す。それにより、作品構造の理解に留まるのではなく、「考えの形成」に向けた「構造と内容の把握」「精査・解釈」となるように単元を構成していく。さらに『最後の一通』では、文通を通して理解したことを基に、「だから私は『ごんぎつね』をこう語り継いでいくね」と結ぶ見通しを共有しておくことで、考えの形成・深化に向けて問いを見だし、その解決過程で「私はこの『ごんぎつね』をこう語り継ぐ」という考えを更新し続ける学びを生み出していく。

(2) 子どもたちは、6月に「白いぼうし」を学習材として、物語の不思議を解説する『密着取材！タクシードライバー松井さん』という番組制作に取り組んだ。松井さんへのインタビュー（問い）、松井さんの回答（同化）と、スタジオ解説（異化）という活動を通して、登場人物の気持ちを具体的に想像するとともに、物語を俯瞰して捉えることの素地ができつつあった。9月には、前述した「一つの花」での学習で、登場人物の気持ちの変化を捉える中で、特別な言葉に着目し、作者の思いに迫る読みを経験している。

本単元において、人物や物語に対する考えを深める学習に取り組むことは、次単元（学習材：「プラタナスの木」）において、初読段階で物語に対する考えをもち、それを基点として精査・解釈を深めていく学習へとつながっていく。

(3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数35名）

① 物語の学習において、多くの子どもが自ら問いを見だし、他者と関わりながらその問いを解決していこうとすることができる。ただし、問いを見出すことや問いの解決過程で支援が必要な子どもが5名ほどいる。

②「『一つの花』をどう語り継ぎたいか」を記述する活動に取り組んだところ、他作品にも当てはまる抽象的表現になった子どもが7名、場面の移り変わりに着目したもののあらすじになっていた子どもが5名、場面の移り変わりに着目できなかった子どもが2名いた。

3 単元の目標

- (1) 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにすることができる。
- (2) 登場人物の気持ちの変化などについて理解したことに基づいて、感想や考えをもち「どんな物語として語り継ぎたいか」をまとめることができる。
- (3) 物語を構成する叙述（行動や会話、語り、心内語、副詞等）のよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。

4 指導計画（12時間取り扱い）

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
（0次段階）	0 語り継がれてきた作品に親しむ。	○ 伝承物語に親しめる環境を整えておく。子どもたちが興味をもち始めた頃に既習作品をどう語り継ぎたいかを考える活動に取り組みせ、言語活動へのレディネスを形成する。	
1 ・ 2	1 単元の見通しをもつ。 (1) 範読を聞き、あらすじを捉える。 (2) 学習計画を立て、一通目を書く。	○ 範読に対するつぶやきを取り上げながら物語の展開を整理し、感想や考えをもつ土台をつくる。 ○ 手紙の相手は、ごん・兵十のどちらかを選べるようにすることで、初読段階から考えをもちやすくする。	【思】文章を読んで理解したことに基づいて、初めの感想や考えを記述している。 (一通目の手紙)
3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ・ 8 ・ 9	2 ごん・兵十と文通をする。 (1) 返事を書く。 (2) 返事で解決できなかった問いについて話し合う。 (3) 話し合ったことを基に返事を書き直したり、二通目以降を書いたりする。	○ 手紙のお尋ねにどう答えていいかわからない場合には、人物になりきって返事を書くのではなく、読者（自分自身）の立場から人物に宛てた二通目・三通目を書いてよいことにする。このように、問いの解決状況に応じて活動を選択できるようにすることで、今解決しようとしている問いの切実さが増したり、解決した問いを更に更新したりする姿を生み出していく。（本時8／12）	【思】ごんと兵十の気持ちの変化について想像している。 (人物からの返事) 【主】「どんな物語と語りつぐか」を粘り強く追究する中で、問いを具体化したり、活動を選択したりして学習を調整している。 (手紙・国語日記)
10 ・ 11 ・ 12	3 単元の学習を振り返る。 (1) 互いの書いた手紙を読み合う。 (2) 単元の学習を振り返り、新美南吉への手紙を書く。	○ 最初と最後の一通を読み比べ、なぜ考えが変わってきたのかを振り返りながら交流する場を設定することで、単元を通して身に付けてきた力を実感できるようにする。 ○ 『作者への手紙』として「ごんぎつね」や並行読書をした作品をどう語り継ぎたいか、どんな力がついたかを書く活動を設定し、単元の学習を振り返れるようにする。	【思】文章を読んで理解したことに基づいて、考えを記述している。（最後の一通） 【知】様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにしている。 (文通の記述内容・作者への手紙)

5 本時の学習（修正案）

(1) 目標

ごんや兵十の気持ちの転換点について検討する活動を通して、問いを具体化したり、解決方法や言語活動を選んだりしながら、『最後の一通』に向けて自己の学習を調整している。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
3	1 本時の見通しを確かめる。	○ 僕は、まだ『最後の一通（仮）』の『私はこう語りつぐ』がかけていないんだよね。
1 2	2 全体で話し合い、現時点での問いの解決状況や考えの納得度を振り返る。	○ 私は書けてはいるけど、兵十側の気持ちを考えられていなかったから、そこを深めたいな。 ○ 僕も兵十側で、ごんを撃った時の気持ちを考えたいな。
2 5	3 個々で活動の取り組み方を選択し、自分の問いを追究する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px 0;"> <p style="text-align: center;">＜予想される活動＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・劇をする ・文章を読み返す ・話し合う ・手紙を書く など </div> <p>※ 後半にかけて、徐々に手紙を書く活動へ移行していく。 (10分程度)</p>	○ 撃った時と後では気持ちが違いそうだね。「ドンとうちました。」の時は「よし！仕留めた！」って思ったんじゃない？ ○ 「おや。」のところでちょっと変わっているよ。「ごん、おまいだったのか」のところでも。 ○ まだまだ「変わり目」はありそう！ ○ ごんの「気持ちの変わり目」は、前の場面にもたくさんあるよ。これをつなげて考えたら、気持ちの変化がもっとわかりそうだね。 ○ よし、僕はもっと「変わり目」を見つけるために、もう一度読み返してみよう。 ○ 私は、「変わり目」は見つかったから、どう変わったかを劇をで考えてみよう。 ○ ごんは、5の場面で引き合わないと思っていたでしょ。それでも持っていくのは、償い以外の何かがあるのかな？ ○ 兵十に気付いてほしかったんじゃない？ ○ ごんは、気付かれたらまずいのは分かっているけど、心の奥では気付かれたって思っていて、それで明るく日も行ったのかもね。 ○ ごんって、どんどんその思いが強くなっているよね。でも兵十はずっと知らなくて、ごんを撃ってしまった。兵十にとっても悲劇だよな。
5	4 本時の学習を振り返り、国語日記を書く。	○ やっぱごんと兵十、二人にとって悲劇の物語と伝えるべきかな。でも、兵十がごんのことを語り継いだとしたら、撃たれたこと自体は悲劇でも、ごんの本当の思いが伝わる物語とも言えるんじゃないかな。 ○ だったら、ごんの本当の思いが何だったのかを明らかにして、『最後の一通』を書きたいな。



本時は、全員で一つの問いを解決するのではなく、『ごんぎつね』をどう語り継ぎたいか』についての考えを一人一人が更新するために、各自の問いの解決に取り組んでいきます。その中で、個々の問いの解決と言語活動の再考を活性化させるには、どんな「協働」の場が有効なのか、子どもの姿を通して提案します。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示、教材・教具、評価）

- それぞれの「最後の一通（仮）」に対する納得度を基に、あと一步深めたいところを確認した上で、以下の課題を確認する。

「最後の一通」に向けて、考えを広げ深めよう。

- 本時の進め方として、後半は各自で問いの解決に取り組むことを確認しておく。その上で、それぞれが、どんな問いや考えをもっているかを出し合わせていくことで、本時の後半に向けて、着目する叙述や考える視点等を広げられるようにする。その中で、現時点での問いや困り事を取り上げ、それぞれの発言の中で、どの場面のどの叙述と結びつけているかを板書していく。
- 上記の手立てについて、まずは兵十側の「ごんを撃った時どんな気持ちか？」という問いを取り上げ、「どこのこと？」と問い返ししながら拡大教材文に問い用の付箋を貼ろうとして見せる。（※問いの付箋は、単元前半で個々が自分の問いを貼っている。）そうすることで、第6場面における兵十の気持ちの転換点が複数あることに気付けるようにする。なお、「転換点」については、「変わり目」等の平易な言葉で共有する。
- 転換点を見つけることで、気持ちの変化をより具体的に捉えられることを共有した上で、ごん側の問いをもっている子どもに対して、「ごんには、こういう『変わり目』がいくつあった？」と問う。それにより、兵十側の問いで共有した「変わり目を見つける→変化を具体的に想像する」という考え方を、ごん側でも生かせるようにする。
- 全体の場合は、問いに対して全員の納得解をまとめることなく、問いや考えの幅を広げ、個々での再考の場につなげることを目的とする。そこで、上記のような問いに対して、ある程度考えとその根拠、理由付けが整理できたところで、再度自分の「最後の一通（仮）」に立ち返らせる。そして、今の時点で書き加えたり書きかえたりできそうなところはあるか、書きかえるにはあと何をどのように解決すればよいか、ペアと確認する時間を設けた上で、各自の活動に入っていくようにする。
- どう解決するかについての見通しがもてない子どもがいた場合は、学びの足跡の【問いを解決するために】に立ち返らせ、その中から選ぶよう促す。
- 学習活動3の後半では、一人一人が手紙を書く時間を設ける。前時までと同様に、手紙は「ごんへ」「兵十へ」「ごんからの返事」「兵十への返事」から選んでよいことにすることで、自分の問いの解決状況を感覚的に捉えられるようにする。
- 個々での振り返りの前に、「①なぜその手紙を選びどんなことを書いたのか」「②現時点での納得度と次どうしたいか」について話す機会を設ける。その上で、国語日記を記述する時間を設け、感覚的に捉えていた自己の学習状況とそれに基づく学習調整について言語化できるようにする。

【評価】

自分の問いの解決状況や『私はこう語りつぐ』の納得感を基に、問いを具体化したり、活動を選択したりしている。

（手紙、国語日記）

